

小川未明論

——我が子を亡くした親のかなしみ——

長田 真紀

I

逆縁——親が己の死よりも早く我が子を喪い、弔わねばならないことほど、耐え難い不条理はない。それは、親にとって最大の不幸であり、同時に不孝でもある。

病で、事故で、災害で、事件で、戦争で、そして自死によって、子どもの死に直面する親は想像以上に多い。そのかなしみや嘆きは決して薄れることなく、死んだ子どもの存在は時とともにますますはっきりと心に刻まれていくのである。

「日本のアンデルセン」と称される小川未明もまた、我が子を亡くした親のひとりであった。そして作品のなかに、子どもの病や死を繰り返し描いた。

未明は自分の童話について、「むしろ、大人に読んでもらった方が、却って、意の存するところが分ると思ひます」（「今後を童話作家に」大正十五年五月十三日「東京日日新聞」）と述べているが、これは、童話というものが、単に子どものための読み物ではなく、大人にも十分通じる文学であらねばならないとの考えを持っていたからである。加えて、自分と同じように子どもを亡くした親たちへの深い思いでもあったろう。

本稿では、子どもの死という切実な体験を源に、文学として結実していった作品をいくつか取り上げ、いささかの考察を試みたい。

II

まずは、未明自身の幼少年期およびふたりの子どもを亡くした体験を中心に、伝記的事項を鳥瞰しておきたい。実は、未明が子ども時代に味わっ

た「犠牲」を、今度は親になった時に、かたちをかえて子どもたちに強いることになったからである。

小川未明、本名・小川健作は、明治十五年（一八八二）四月七日、父澄晴（三十三歳）、母千代（二十九歳）の次男として新潟県中頸城郡高城村（現・上越市）に生まれた。

長男が生後まもなく病死したため、両親は次に生まれた未明を非常に案じた。「捨て子は丈夫に育つ」という当時の俗信から、両親は未明を形の上での捨て子とし、ろうそくや灯油を商っていた近所の丸山家（広作・フサ夫婦）で、貰い乳をするなど三歳頃まで育ててもらっている。このことで、未明は実の両親に対する疑念を後々まで持つようになった。

小川家は母方の実家で越後高田藩主榊原家の家臣を代々つとめた家柄ではあったが、微禄だったらしい。父澄晴は同じ榊原家の家臣だった大川家からの婿養子であった。嘉永二年（一八四九）一月二日、大川義応の三男として出生。幕末の会津戦争に参戦し、背中には刀の大きな傷が残っていたという⁽¹⁾。

さて、澄晴の人となりを一言でいうならば、強烈な個性をもった異色の人物といえるだろう。澄晴は教道職の資格を有した神道の修行者で、上杉謙信の熱狂的な崇拝者であった。そして、謙信の居城があった高田の春日山城址に、謙信を祭る神社を独力で創建すべく日夜奔走していた。黒紋付きの羽織り袴、山高帽といったいでたちで、県内外に足を運んでは、自分の信念を熱く語り寄付金集めに夢中になっていた。時には物乞いに近いことも辞さなかったという。現在、春日山神社には澄晴が県内全町村長から集めた募金許可証が残っている。

明治二十七年二月、神社創建が許可。明治三十年五月、未明が十五歳の時、春日山神社は創建されるが、ちょうど未明の幼少年期にあたる間、澄晴はほとんど家庭を顧みない生活を送っていたのである。母や祖母から慈しまれたとはいえ、父親不在の家庭で幼い未明が味わった孤独感は大きかった。

そんな澄晴から未明は、ロマンチストで情熱的な気質を受け継ぎ、また、深い漢学の素養を授けられた。

未明は早稲田大学の英文科で坪内逍遙の教えを受けたことで、作家とし

ての道を歩むことになる。未明という筆名も、逍遙がつけてくれた。

明治三十九年、山田キチと結婚。明治四十年の夏、正宗白鳥の紹介で読売新聞社に入社。上司 かみつかさしょうけん 小剣のもとで社会部の夜勤記者となった。同年七月、長女・晴代が誕生。翌年十二月には、長男・哲文が生まれた。生活者としての責任を余儀なくされたにもかかわらず、新聞社は一年足らずで退社。明治四十一年十月からは文芸雑誌「秀才文壇」の編集者となるものの、それも翌年には辞めて、執筆活動に専念する決意をした。

当初、小説から出発した未明は、次第に童話作家としても本格的活動をはじめようになる。明治四十三年に刊行された第一童話集『赤い船』は日本最初の創作童話集であり、芸術性に富んだ完成度の高いものであった。

一方、生活は困窮を極め、二児は栄養不良に陥った。見かねた澄晴が上京し、未明に帰郷して春日山神社を継ぐよう、諭したほどであった。

大正三年（一九一四）十二月二十三日、哲文が疫痢のためわずか六歳で死亡。大正七年十一月四日には晴代が開放性結核で死亡。十一歳だった。「小川未明年譜」には、「貧困時代を共に過ごした二児を失って、悲しみ骨に徹し、はなはだしく鞭打たれる⁽²⁾」と記されている。二児が病死した遠因が、父親である自分にあったことを、未明は十分自覚していたのである。

澄晴が自分の志を貫き、謙信顕彰のための春日山神社創建という己の夢を実現させるために、子どもの未明に強いた寂しい生活。皮肉なことに、はからずも今度は未明がふたりの子どもを犠牲にしてしまったのである。

代表作「金の輪」「牛女」（大正八年）「赤い蠟燭と人魚」（大正十年）など、未明の描く作品には、父親不在の作品が非常に多い。未明自身の幼少年期の体験と、ふたりの子どもを亡くした親としての罪障感が濃厚に影を落としていると考えられる。

Ⅲ

長男・哲文の死が濃厚に影を落としている「金の輪」（大正八年二月二十一日、二十二日「読売新聞」）は、未明の全作品のなかで、完成度において一、二を争う作品であり、詩的情趣溢れ、未明文学の魅力が遺憾なく発揮された傑作である。

長い間病気で臥せていた太郎少年は、まだ春浅い三月の末、漸く床を離れることができた。往来に出てみたものの、子どもたちは遠くへ遊びに行っているらしく、誰の姿も見えない。しょんぼりと太郎が細い道を歩いていると、鈴を鳴らすように、金の輪の触れあう音が聞こえてくる。それは、ひとりの少年がふたつの金の輪をよい音色を響かせながら回して走っているものであった。太郎には見覚えのない少年であったが、少年の方は太郎に向かって友達のように微笑んで去って行ったのである。

翌日の同じ時刻、太郎は再び金の輪を回して走ってくる少年を見る。少年はいっそう親しげに微笑み、走り去って行った。太郎は、いままで一度も見たことのないその少年が一番親しい友達のような気がして、明日こそ話しかけて友達になろうと思いながら、家に入ったのであった。

その夜、太郎は少年と友達になり金の輪をひとつ分けてもらい、一緒に赤い夕焼け空の中に走って行く夢をみた。

明くる日、太郎はまた熱が出て、二、三日めに七つで亡くなってしまったのであった。

岡上鈴江氏は、亡くなる前の哲文と未明のエピソードを、次のように記している。⁽³⁾

猩紅熱にかかって入院した姉に付添って、母が家を留守にしたひと夏、父は人気^{ひとけ}のない、ひっそりした家で、はじめてこの幼ない息子とふたりだけの生活をしたのであった。

(中略) 陽のあかるい昼間のあいだはいいけれど、夕方、あたりが闇につつまれる頃になると、小さな子は、家の中にいるのを嫌がり、「おとうさん、散歩にいこうよ」と、父の手をひっぱった。

そして外につれだされると、うれしそうに父にびったりくっついて、いつまでもいつまでも明るい賑やかな街の中を歩きたがった。

かなり歩いてから、父が家につれもどそうとすると、幼ない息子は小さな足をふんばって一步も動こうとしない。父は自分とふたりきりの淋しい味気ない生活を嫌って、車や人の通るあかるい街をいつまでも歩いていたいと願う子どもの心情を哀れにおもいながらも、いくらなだめてもすかしてもきかない子どもをみると、つい腹がたって、こ

つんとたたいたという。

夕暮れ時の哲文との思い出は、「金の輪」の太郎が、少年と一緒に赤い夕焼け空の中に走って行く夢に投影されているだろう。

太郎が少年に出会ったこと、そして少年と金の輪を回す望みが夢の中で叶えられたことは、結果的に数日後に七つで死んでいく太郎の救いとなっている。太郎の心の分身であるかのような少年が、白昼夢の幻であったのか、現^{うつ}のものであったかは問題ではなく、太郎にとって真実であったということだけが確かなことである。

小学校にも上がらぬうちに疫痢で死んでいった哲文は、そう多くは友達もいなかっただろう。思う存分遊ぶこともなくいつも寂しい思いをさせてしまった哲文を想う時、未明は無念の思いに胸がしめつけられたにちがいない。

作品中、「其の晩、太郎は母親に向って、二日も同じ時刻に金の輪を廻して走って行った少年のことを語りました。母親は信じませんでした。」と記されているのは注目される。

長らく病気で床に就いていた太郎には、漸く外へ出られるようになって、一緒に遊ぶ友達はいない。ぽつねんとする太郎が、微笑みながら金の輪を回して走っていく少年と出会ったことは、この上もない喜びであった。それが二日続いた晩に、太郎は母親に話すが、母親は太郎にとって一番うれしいその出来事を信じることができない。

子どもの一番身近かにいるはずの親が、子どもにとっての一番大切な真実を容易に理解できないところに、親として哲文の寂しさを受け止められなかった未明自身の姿が見据えられている。

IV

一方、大正七年十一月四日に十一歳で開放性結核で死んでしまった長女・晴代への思いが基底に溢れているのが、「千代紙の春」（原題・「千代紙」、大正十二年九月「少女倶楽部」）である。

町はずれの橋のそばで、ひとりのおじいさんが鯉を売っていた。その鯉は今朝、問屋から仕入れてきたものだった。夕暮れまでに小さな鯉はたいてい売り尽くしたが、一番大きな鯉は売れずに残ったままであった。おじいさんは気が気ではなく、なんとかして早く売りたいと焦っていた。貧しい家にはふたりの孫がいて、おじいさんが鯉を売って金を持って帰らねば、夕飯を食べることもできなかったからである。

そこへおばあさんがとぼとぼと通りかかった。このおばあさんには、美代子という十二歳の孫がいたが、病気で寝たり起きたりの生活を送っていた。学校にもいかれず、友達と外で遊ぶこともできず、家のなかで絵本を読んだり人形遊びをするぐらいだった。おばあさんは、「どうかして、早く、美代の病気をなおしたいものだ」「ほんとうに、あの子の病気は、なぜなおらないのだろうか？」といつも心配していたのである。

おばあさんは大きな鯉に目を留めたものの、鯉が元気がなくじっとしているのが気になって「どれ、ちょっと尾を持って、跳ねるか見せておくれ」と注文をつけた。おじいさんが、鯉の尾を持って高くさしあげた途端、それまで死んだようにじっとしていた鯉は、おじいさんの腕をたたきつけて、河のなかに一気に飛び込んでしまったのである。実は、その鯉は、捕らえられる前に住んでいた故郷の池や早瀬の淵がなつかしくてしかたなかったのである。そして、今逃げなければ、数分のうちに殺されてしまうと察知し、一目散に河へ飛び込んだのである。

おじいさんは、おばあさんが、鯉の尾をつかんで持ち上げてみるなどと言わなければ、鯉は逃げなかったのだから、どうか代金を払ってくれと頼む。一方、おばあさんは、受け取りもせず、孫の口にも入らないものに、なぜ金を払う必要があるのかと、言うのであった。その時、ふたりが言い争っているのを聞いていた易者のような男が、「おばあさん、こんなめでたいことはありません。死んだと思ったこいが跳ねて河の中へ躍り込むなんて、ほんとうにめでたいことです。きっとお孫さんのご病気は、明日からなおりますよ。孫のかわいいのは、だれも同じことです。このおじいさんにもかわいい孫が家に待っているのだから、おばあさん、こいの代金をはらっておやりなさい」と助言した。

おばあさんは、それをもっともだと思い、鯉の代金を支払った。喜んだ

おじいさんは、自分の孫に土産として買ってあった千代紙を、おばあさんの病気の孫へあげようとする。おばあさんは、「千代紙なら、うちの子はたくさんもっていますよ。そんなものはいりません。」と断ったものの、子どもというものはまた違った千代紙をもらうとよろこぶものだとおじいさんから言われ、受け取って家へ戻った。

この出来事を家族に話すと、美代子の母は、受け取ってもいない鯉の代金を払ったとはもったいないことをした、と言う。一方、父は「それはめでたいこった。きっと美代子の病気はなおってしまうだろう」と言うのであった。

おばあさんが、鯉の逃げた時の様子を詳しく話すと、皆は大変おもしろがる。美代子は、鯉が河をのぼって故郷へ帰えれただろうか、鯉の子どもや友達はどうなかに喜んだことだろうと思うのだった。さらに、そのおじいさんにも自分と同じような年齢の孫がいることを知ると、どんな子どもだろうかと、なんとなく懐かしい気持ちになり、会って友達になってみたいと思うのであった。

美代子の病気について医者、腹に虫がわいたせいではないか、その薬を飲ませてみようと言っていたことを、母は皆に伝える。すると父は、それならやはり鯉は食べないほうがよかったのだと、おばあさんに言った。

美代子はその晩、もらった千代紙をはさみで切って、いろいろな花の形にした。そして、病気が治ったら、友達と野原や公園へ行こうと考えた。外は明るい月夜で、美代子は千代紙で作った花をみな窓の外へ散らした。

二、三日後、庭には、さまざまな花が咲き開いた。千代紙の花が木の枝について、本当の花になったのである。そして、美代子の病気はすっかりよくなったのである。

岡上鈴江氏は、亡くなる前の晴代の様子や、晴代の亡骸が火葬場に運ばれた時の出来事を、次のように記している。⁽⁴⁾

なくなった姉のことは、かすかに記憶にのこっている。天神町の家の前庭で、ある暑い日の陽ざかり、たぶん夏休みに入ったばかりの頃だったのではなからうか。たらいで行水をしていた姉の身体をみて、父がおどろきの声をあげたのをおぼえている。

「やせた、やせたじゃないか、ええ、おいっ」

小さな娘のかぼそい背中に、背骨がいたいたいほど浮き出しているのをみて、父は母に向かって叫んだ。

その時の父の声が、そしてまた、縁側に立って、ハツ手の葉かげで行水をしている姉の姿を凝視していた両親の姿が、私の脳裡から消えそうできてなかなか消えない。

集団検診さえなかったその頃の小学校で、姉は机を並べていた隣りの子の開放性結核に感染してしまったのであった。

亡くなった姉が火葬場に運ばれた時、火葬場は混んでいた。悲痛にくれていた父は、そこで、先に処理されるべきはずの娘の小さな棺があとまわしにされ、あとから着いた金持の家の棺がさきに処理されるのを目の前でみた。

「貧乏だから、あとまわしにするのか！」

と、悲しみは怒りに変わり、激しく怒鳴ったという。

「一緒にいって下すった方たちが、『まあまあ、こんなところでもなったりするものじゃない』と、なだめて下さったが……」

実際の晴代は結核に感染し、やせ細って死んでいった。死んだあとも、火葬場で非常に理不尽な扱いを受けた。未明の深い悲嘆と社会に感じたやり場のない憤りはいかばかりであったろうか。

しかし、「千代紙の春」では、美代子の病気はすっかり快復し、庭にまいた千代紙の花は本物の花になって咲き誇る。鯉を売っていたおじいさんは、待っている孫にお金を持って帰ることができたし、鯉もすんでのところで河に逃げ去ることができ、すべてが幸福につつまれる。

この童話は、一見安易なハッピーエンドのたわいもない作品にみえる。研究史上も取り上げられることはほとんどなかった。しかし、晴代の死が悲惨であっただけに、未明はそのアンチテーゼであるかのように、作品世界を幸せのまま封印したのである。

人生の花を開かせることも、鯉のように生き延びることもできなかった晴代の短い生涯を考える時、「千代紙の春」の、その澄みきった明るさは、

かなしい。

V

「金の輪」や「千代紙の春」は死んでいく子どもや病気の子どもに焦点があてられた作品であるが、「月とあざらし」（大正十五年四月『兄弟の山鳩』アテネ書院）は、子どもを失った親そのものの姿が描かれている。

銀色に凍った北の海の氷山の頂きに、一匹のあざらしがうずくまり、毎日周辺を見回していた。このあざらしの子どもは、秋のはじめにどこかへ消えてしまったのである。子どもを失ったあざらしは、何を見ても悲しくて心が張り裂けんばかりであった。吹きすさぶ風にも、「どこかで、私のかわいい子供の姿をお見になりませんでしたか」と尋ねずにはいられなかった。風は、「しかし、あざらしさん、秋ごろ、猟船が、このあたりまで見えましたから、そのとき、人間に捕られたなら、もはや帰りっこはありませんよ。もし、こんど、私がよく探してきて見つからなかったら、あきらめなさい」と言って、吹き去って行ってしまった。あざらしは、毎日、風の便りを待つが、その約束をした風は戻ってはこなかった。後からきた仲間の風にも尋ねてみるが、言伝てをするからと言って、過ぎていった。

毎日、毎夜、ひたすら子どものことを思って悲しみにくれるあざらしを、心からかわいそうに思った月は、やさしく照らしながら、「さびしいか？」と声をかけるのであった。そのたびにあざらしは、「さびしくて、しかたがない！」「さびしい！　まだ、私の子供はわかりません」と、月に訴えるのであった。「私は、世の中のどんなところも、見ないところはない。遠い国のおもしろい話をしてきかせようか？」と月が言っても、あざらしは、「どうか、私の子供が、どこにいるか、教えてください。見つけたら知らしてくれるとって約束をした風は、まだなんともいってきたくありません。世界じゅうのことがわかるなら、ほかのことはききたくありませんが、私の子供は、いまどこにどうしているか教えてください」と頼むのであった。「この北海の上ばかりでも、幾ひきの子供をなくしたあざらしがいるかしれない。しかし、おまえは、子供にやさしいから一倍悲しんで

いるのだ。そして、私は、それだから、おまえをかわいそうに思っている。そのうちに、おまえを楽しませるものを持ってこよう……」そう言って月は、雲の後ろへ隠れた。

それ以来、月はその約束を決して忘れたことはなかった。ある晩、南方の野原を照らしていると、牧人の男女が、咲き乱れた花のなかで笛を吹き、踊り、太鼓を鳴らしていた。宴が終わった後、草原にひとつの小さな太鼓が投げ出されてあるのを、月は気付く。それをそっと拾いあげた月は、背中にしょって北へと旅するのである。

北の海では、相変わらず凍てついた氷山の上であざらしが子を思いうずくまっていた。月は「さあ、約束のものを持ってきた」と言って、太鼓を渡してやった。あざらしは、その太鼓が気にいったらしく、後日、月がこの近くの上を照らしにきた時には、氷も解けはじめたなかで、あざらしの鳴らす太鼓の音が波間から聞こえてくるのであった。

この「月とあざらし」は、子どもを失った親あざらしの苛酷な喪失感と、あざらしが、子どもが戻らないという耐え難い現実を深くみつめ、向き合いながら、漸くそれを受容していくプロセスを見事に描き切った傑作である。

最初にあざらしに問いかけられた風は、子どもはおそらく人間に捕まっただろうからもう帰ることはないだろう、あきらめろ、と答える。つまり、あざらしに客観的事実を伝える存在である。そして、それは風の特徴とともに一回性きりのものである。

一方あざらしは、それで思い切ることはいできない。繰り返し繰り返し子どものことを考え続け、膨大な時間を悲嘆にしみながら氷山の頂きにうずくまり過ごすのである。

その独りぼっちで痛みにたえるあざらしに寄り添うのが、月の存在である。「さびしいか?」「さびしくて、しかたがない!」「さびしいか?」「さびしい! まだ、私の子供はわかりません」必死に子どもを求め、さびしさを訴えるあざらしの心からの叫びを、月は静かに受け止める。子どもを見つけ出すこと、つまり現実的な解決が不可能であることを、月は十分承知している。できることは、ただひたすら、心をこめてあざらしのかなし

みを分かち合うことだけなのである。

月は南の野原で拾って来た太鼓をあざらしに渡してやるが、その後、あざらしの打つ太鼓の響きが、海の波間からずっと聞こえてくる。この描写は、一読して胸に深く刻まれる。

あざらしは、黙々と太鼓を打つことで、子どもを失ったことを受け入れ、絶望を超えていく。荒涼とした氷山の「氷が解けはじめ」たのと同じくして、あざらしの凍てついたかなしみのところは、わずかに、ひそやかに、解けていくのである。

月と太鼓は、あざらしと共にいる、共にある、ものとして、そのかなしみを支える存在である。

岡上鈴江氏は、哲文の亡くなった家について、次のように記している。⁽⁵⁾

私の記憶にのこる一番古い住居は、三、四歳の頃住んでいた牛込来町の家である。

神楽坂にほど近く、広い通りからちょっと入った便利な場所にあった。その広い通りにはホーリネス教会というのがあって、土曜か日曜の夜になると、信者たちが長い行列をつくり、太鼓をたたき、「信ずるものは誰もみな救われん」とうたいながら、ぞろぞろと賑やかに、私の家の前を通りすぎていった。

この時の太鼓の響きが、「月とあざらし」の末尾の太鼓の描写に投影されているのかもしれない。

VI

晩年の未明とキチ夫婦の様子を、岡上鈴江氏はこう書き記している。⁽⁶⁾

ふたりの子どもを失った痛手がどんなに深かったかは、晩年になってもときたま亡くなったふたりの話になると、父も母も目に涙を浮かべ、なにかに責められるみたいに切なそうにうつむいてしまうので測り知れるのであった。

ふたりの子どもを犠牲にしてしまったことは、結局のところ親の苦しみとして未明のもとに戻ってくる。それはつまり、未明自身の払った大きな

代償と刻苦にほかならない。

しかしながら、子どもの死とそのかなしみの深い淵で懊悩する未明のころの軌跡を辿るかのようなこれらの作品は、未明の個人的な体験を超えることとなった。短かった子どもの生命をも、作者小川未明の生命をも超えて、文学作品としての永続性のなかに、その存在の痕跡を確かに残したのである。

注

(1)～(6)岡上鈴江『父小川未明』(一九七〇年五月 新評論)

※小川未明の伝記的事項については、『父小川未明』のほか、《新潮日本文学アルバム60》『小川未明』(編集・評伝 砂田弘 一九九六年三月 新潮社)を参照した。